

リバタリアン・パターンリズムは 語義矛盾でない(2003)とその 批判論文の紹介

Cass Sunstein Richard Thaler

Nathan Berg Gerd Gigerenzer

Edward Glaeser

発表者 科学哲学科学
史専修 修士一回 近岡
利昌

リバタリアン・パターンリズムとは？

- SunsteinとThalerが(S&T 2003.a)の論文で創造した言葉
- 公的・私的な制度が人の行動に影響を与えつつ、なおかつ個人の選択の自由を尊重することは可能であり、望ましい(S&T 2003.b)という立場
- 人の選好は理想的な合理性からしばしば外れ、例えば何が出発点かという事に影響されてしまう。
- こういった場合、制度がその人のため、行動に影響を与えることは不可避であるとする

著者のプロフィール C.Sunstein

- (1954-)アメリカの法学者、81年からシカゴ大、2008秋からHarvard
- 憲法、民主制、情報社会における言論、リスク論に関する著書を発表
- 2000-2007最も引用の多かった法学者 (Leiter)
- 民主党大統領候補Obamaの友人でAdviserでもある



著者のプロフィール R.Thaler

- (1945-) アメリカの
経済学者
- 心理学の成果を経
済学に取り入れた
行動経済学の創始
者の一人
- Obamaの経済政策
顧問



3つのキーコンセプト

- リバタリアニズム
- パターナリズム
- 行動経済学

リバタリアニズム

- 個人の自由は、他者に危害を与えない限り、最大限に尊重されなければいけないという考え方
- また国家の個人に対する介入は、社会的・経済的どちらの意味においても最小限でなければいけないとする

パターナリズム

- 国あるいは個人が他者に対して、その人の状態をよりよくする、あるいは危害から守るという正当化のもと、その人の意思に反して行う介入 (Stanford Encyclopedia of Philosophy)
- ある人の行為が第3者に危害を与えることを防ぐために行う介入はパターナリズムではない (Harm to othersの原則)

行動経済学(1)

- 心理学の研究成果を取り入れた経済学説
- 従来の経済学が、基本的に個人の合理性を作業仮説としていたのに対し、現実の主体は限定的な合理性のもとで、しばしば体系的に歪みの入った判断を行うという事を分析に取り入れた。
- 2002年、創始者の一人D.Kahnemanがノーベル経済学賞受賞

行動経済学(2) 保有効果

- 保有効果とは、人があるものを手に入れるために払ってもいい額(WTP)と、手放す代わりにもらいたい額(WTA)が異なるという現象
- マグカップをランダムに分配し、取引をさせた実験で、WTPの中央値が\$2.25-2.75、WTAの中央値が\$5.25 (Kahneman&Knetsch 1990)
- 著者の一人Thalerがこの言葉(Endowment Effect)の発明者(1980)

本文紹介

はじめに

- われらが提案するのは、リバタリアンの精神を持つパターンナリズムである
- 個人の選択を阻むいかなるアプローチも擁護するつもりは無い。この意味でリバタリアン
- 制度の設計者は、ただ単に選択者の行為を予測してなぞるだけでなく、自覚的に厚生を促進する方向に、人の行動を誘導すべきである。この意味でパターンナリズム
- 独断的反パターンナリズム論者には1つの誤った前提と二つの誤解がある

独断的反パターンリズム論者の 誤まった前提(1)

- 人は自分にとって最善の選択をしている。
あるいは第3者の誰よりもよい選択が出来る。

この命題はトートロジーか、あるいはテスト可能な命題かどちらかである。トートロジーなら無意味である。人がどれだけよい選択が出来るかは経験的な問題であり、分野によって異なる。

独断的反パターンリズム論者の 誤解(1)

- パターンリズム以外に可能な選択肢がある。
人の選択は制度設計者の影響を受けざるを得ない。あなたがカフェテリアの経営者ならどの陳列をするか？(1)消費者の厚生を最善にする陳列(2)ランダムな陳列(3)最も消費者を太らせる陳列(4)消費者の予測される選択に近い陳列
(4)は多くの反パターンリズム論者が好むだろうが、制度の影響を受けていない本当の選択など存在しない。(2)(3)の陳列を推奨する人はいないだろう

独断的反パターンリズム論者の 誤解(2)

- パターンリズムには常に強制が伴う。
陳列順序の選択はある意味でパターンリスティックなものであるが、強制は伴っていない。そして人々が計画者の優先する解決策を拒否できる機会が与えられるなら、悪い計画のリスクを減らすことが出来る。

第1章 選択の合理性

- 60%を超えるアメリカ人が肥満か太りすぎだと考えられている。彼らの全てが最善に食事を選択しているとは考えにくい
- 過去30年間、心理学者と経済学者は、個人の下す判断の合理性に問題を提起してきた。実験室に限らず実社会でも不合理性は観察される (Benartzi&Thaler2002など)
- 強調したいことは、選択を阻むのではなく、選択の自由を認めつつ厚生を促進する方向に人々を誘導する戦略である

第2章 パターナリズムは不可避か

- 制度を改革した場合、新しいより有利な選択肢をデフォルトにする離脱戦略(opt-out)、現状維持の選択肢をデフォルトにする加入戦略(opt-in)の二つの戦略が考えられる。
- 現実の場合、加入戦略をとると、新しい制度がたとえ利用者にとって利益があり、切り替えコストが微々たるものであっても、多数の人が現状維持の選択肢を選んでしまう(保有効果、アンカリング、フレーミング効果..etc)

貯蓄と雇用者

- 企業年金プランへの参加は、任意加入にするか、自動登録型(離脱自由)にするかで参加率がかなり変わってくる
26.3% 93.4% 35.7% 85.7% (Choi, et al, 2002)
- 能動的に参加を選択することを要求したときよりも自動登録型(離脱自由)の時のほうが参加率が高かった

なぜ選択への影響は避けがたいか？

- 多数派や情報をもつ人への追従、惰性、保有効果、十分に練られていない嗜好
- ただ単に正確な情報を開示するだけでは、影響が逆効果になることもある。最も効果的なアプローチは「何もしなかった場合のぞっとするメッセージと、提案されるプログラムの効果に関する楽観的なメッセージ」
(Caplin2003)

第3章.臓器提供の事例

- 臓器提供のためのデフォルトルールが推定同意の国々(オーストリア・ベルギー、デンマーク、フィンランド、フランス、イタリア、スペイン)では同意率が99%を中央値にして分布
- 利用に一定の行動が求められる米国では28%
- この事例は第3者の厚生に関係するのでパターナリズムではないが、リバタリアン慈愛と呼べるだろう。
- 多くの命が重要な価値を損なわず救える

第5章 異論

- 一旦パターンリスティックな介入を認めると限りなく介入がエスカレートするのでは？

代替案が存在しない。離脱権がエスカレートを抑制する。計画者以外の人々も自己制御の問題を抱えている

- 計画者の合理性は市民のものよりもましなのか？

我々は計画者の合理性が限定的であることを喜んで認める。リバタリアンの抑制が思慮の浅い、悪い動機による計画に対する強力な安全装置となる

逆の方向からの異論

- リバタリアン・パートナーリズムは限定的過ぎないか？

計画者も人間であり完全に合理的ではない。離脱権は安全装置として作用する。かなりの選択の費用を科すことが賢明な場合がある可能性は否定しない。しかし第三者に影響が無い場合は一般的な推定は選択の自由に有利となるべきである。

結論

- 制度がデフォルトのプランを提示するときには常にある種のパターンリズムが生じうる
- デフォルト・ルールを人々の厚生を促進するように設計すべきである
- 選択と厚生との関係は、経験的な問題を示しており、独断やアприオリな論拠、定義によって解決すべきでない
- リバタリアン・パターンリズムは単なる概念上の可能性ではなく、私法公法の多くの分野を再考するための基礎を提供している

批判論文 (1)

Gigerenzer&Berg(2007)

パターナリズムと実験の解釈

- パターナリズムと心理学の実験結果の関係について、2種類の異なった解釈がある
- ひとつは、大多数の人は非合理的なので、厚生増進を目的としたパターナリスティックな規制を主張する解釈。(Rabin & O'Donohue 2003 Bernheim & Rangel 2004)
- Sunstein&Thaler 2003のように、パターナリズムは避けようが無いのだから、opt-out付きの有利なデフォルトを戦略的に設計するという主張もその一つ

もう一つの解釈

- ヒューリスティックスと経験則だけでも、高いレベルの経済的成功と社会的協同が達成できるという解釈
- 同僚のまねをするという単純な戦略が、リスク回避を減らし、結果的に投資収益を増やす
(Berg&Lien 2003)
- 簡素な予測モデルが、交差検定において、多種類の実世界データを使った多変量回帰予測モデルを上回る(Gigerenzer 1999)

パターンナリズムの問題は真剣な 考察に値する

- 制度の詳細、厚生への測定尺度、社会の相互作用が特定されない限り、心理学はパターンナリズムに対してなんら特定の立場を示唆しない
- しかしながら、パターンナリズムの問題は反対にせよ賛成にせよ、イデオロギーによる解決ではなく、真剣な理論的考察を必要としている
- このあと経済学的なモデルが提起される(心理学とパターンナリズムの間に論理的な結合は無いと示すモデル)が省略

放任主義が適切な場合

- 我々の行動が期待効用最大化から心理学的にずれている事が、規制による社会厚生を増加を招くこともあるし、低下を招くこともある
- 一例として、酒やドラッグの消費は価格にあまり反応しないので、規制をかければかけるほどよりリスクの高い消費形態になる (McGeorge & Aitken 1997 Oesterberg 1990)

批判論文(2)

Edward Glaeser(2006)

認知の自己訂正

- 人間の認知に不備があるという事は、政府の意思決定者をより信頼する事につながらない。消費者のほうが自分の認知の改善する動機が強い
- ある研究では報酬を増やすと非合理的な判断が減少する (Smith.V Walker 1993)
- 正解に対して5セント与えるだけで、予測の正確さが向上した (Tversky Edwards 1966)

動機付けの影響

- Aschの同調行動実験の変形版では、課題が容易なとき、50セントの報酬を正解に対して与えると、同調性が減少した (Baron.R Vandello Brunzman 1996)
- 実験室の外では、助言者がいて、本があり、インターネットにもアクセスでき、動機付けの効果がより強く発揮されるだろう

経験の効果

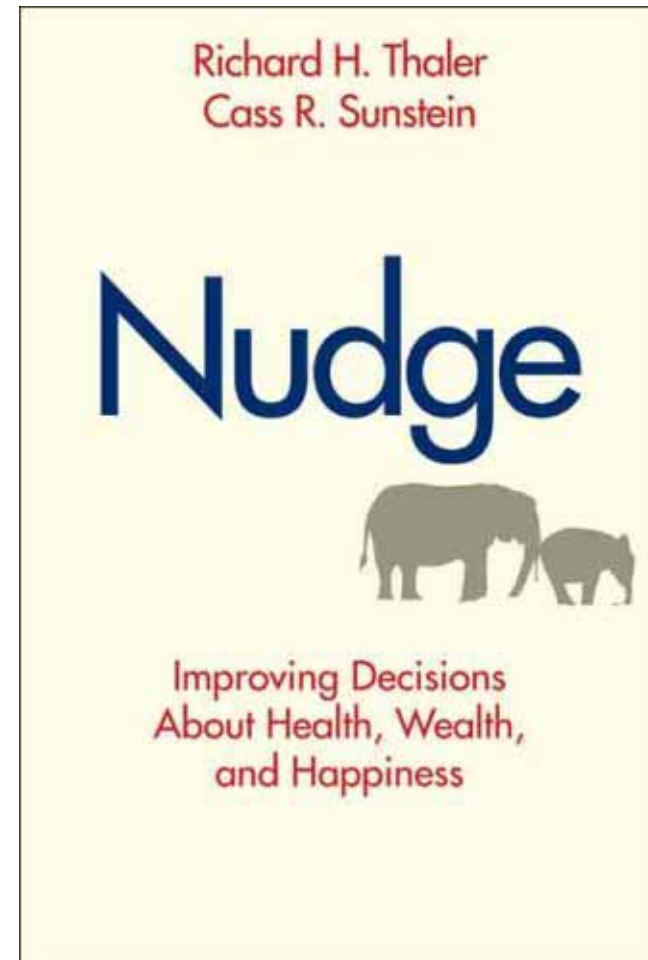
- トレーディング・カードの取引では、市場での経験が増えるにつれ、保有効果が減少 (List.J 2003)
- 年齢が高くなるにつれAschの同調実験での同調行動が減少 (Pasupathi 1999)
- この後公的・私的意思決定者の経済学的モデルが提起されるが省略

性急な導入への警鐘

- リバタリアン・パターナリズムは常に間違っているわけではない。ある場合には不可避で、時に有用である
- しかし学者たちはそれを道具として盲目的に性急に勧めるべきではない
- パターナリズム活動は自らを傷つける強い証拠のある領域に限るべき
- 小規模の社会実験の有用性

リバタリアン・パターンリズム、その後の展開

- Loewenstein(2008)では保有効果以外の認知バイアス利用も研究
- 単行本Nudge(2008)が発売



感想(1)

- S & Tとその批判者は相容れないことを言っているわけではない。政策を天下り的に導くのではなくて、個々の状況で経験的な工夫が必要
- 動機付けの重要性。課題成績に応じた報酬を渡すという実験デザインは妥当性を高めるためにもっと用いられてもいいのでは？

感想(2)

- 顕示的選好を厚生測定の出発点として使えないということは、実体的なWell-beingを測定する手段を開発するという大変な任務を負うことになる(しばらくは経験則でやっていくしかない)
- これまで分野ごとにばらばらに論じられていた応用倫理に対する共通の枠組みになるのではないか？(行動的意思決定論の応用倫理への適用としては Baron.J *Against Bioethics*(2006)などがある)

参考文献とサイト(1)

- Sunstein.C Thaler.R Libertarian paternalism
The American Economic Review vol.93,No.2
(2003.a)
- Sunstein.C Thaler.R Libertarian paternalism is
not oxymoron *The University of Chicago law*
review vol.70,No.2 (2003.b) リバタリアンパター
ナリズムは撞着語法でない(中林良純訳) サンス
テイン京都大学講演(2008.6.9) 配布史料

参考文献とサイト(2)

- Sunstein.C Thaler.R Jolls.C A Behavioral Approach to Law and Economics *Stanford law review vol.50(1998)*
- Camerer.C et al. Regulation for conservatives *University of Pennsylvania law review vol. 151(2003)*
- Lowenstein.G Economist as Therapist *The Foundations of Positive and Normative Economics Caplin&Schotter,ed Oxford University Press(2008)*

参考文献とサイト(3)

- Kahneman.D Tversky.A ed, *Choices, Values, and Frames Cambridge(2000)* 行動経済学の古典的論文が収録されている
Kahneman.D Knetsch.J Thaler.R
“Anomalies: The endowment effect, Loss aversion, and status quo bias”(1990)
Thaler.R “Toward a positive theory of consumer choice”(1980)

参考文献とサイト(4)

- リバタリアン・パターナリズムの批判論文など
- Mitchell.G Libertarian Paternalism is an Oxymoron *Northwestern University Law Review*, Vol. 99, No. 3, (2005)
- Glaeser.E Psychology and Paternalism *The University Chicago law review* 73.1(2006)
- Berg.N Gigerenzer.G Psychology Implies Paternalism? *Social Choice and Welfare*, 28, (2007)

参考文献とサイト(5)

- サンステイン & セイラーのインタビュー、「ヤバイ経済学」サイトから
<http://freakonomics.blogs.nytimes.com/2008/04/15/from-push-to-nudge-a-qa-with-the-authors-of-the-latter/>
- しゃべっているサンステインをみたい人は動画、リバタリアンパターンリズムについては42分ごろから<http://bloggingheads.tv/diavlogs/8936>